

令和2年度 学生による地域活性化プログラム

広田秀樹ゼミナール 活動報告書

グラスルーツ グローバルイゼーション

— 草の根・地域からの人類一体化の推進 —



09

令和2年度

ごあいさつ



長岡大学 学長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、3、4年次の専門ゼミナールに所属する学生グループが、地域の課題解決や魅力創出に向けた調査研究と具体的な取り組みを行うことにより、学生の職業人としての基礎的能力の向上と地域活性化への貢献を目指すプログラムです。本プログラムは、平成19（2007）年度の導入から現在まで十数年に渡り継続し、発展してきた本学の特徴的な教育プログラムの一つであるとも言えます。最近では、取り組みの中心である学生の諸活動を新聞やテレビ、ラジオ等のメディアでも取り上げていただく機会も多くなりました。また、これまで本プログラムの運営に多大なご協力をいただいていた地域連携アドバイザーをはじめ地域の多くの皆様から、各取り組みテーマへのお問い合わせや激励のお言葉をいただいております。長きにわたりこの取り組みを続けて来られたのは、ひとえに地域の皆様の暖かいご支援とご指導の賜物と、心より感謝申し上げます。

「地域活性化とは何か」という問いに対する明確な答えを述べることは難しいと思いますが、本プログラムでは、答えの無い様々な地域課題に対して、それらの課題の原因をどのように捉え、どのように行動を起こして対応して行くのかを学生が自ら体得することができます。本学を卒業後に地域社会の一員となる学生が、将来このような地域課題に対して日々取り組むことになると考えると、これらの体験は彼らにとって大変貴重なものとなることでしょう。

本プログラムでは、各ゼミナールで設定したテーマの下で学生グループが活動を進めて行くこととなりますが、時には学生同士のちょっとしたすれ違いや一緒に活動する地域の大人たちとの意見の食い違い等が起きることもあります。このような体験も学生がさらに一歩、人として成長するためのきっかけとなります。ゼミで決めたテーマをまとめ上げるために、どのように他者とかわりながら取り組みを進めて行くべきなのか、この取り組みの中で自分の役割は何であるのか、などを考えながら活動を行っていくことで、チームで活動することの難しさだけでなく、チームで目標に向かって何かをやり遂げることの充実感や達成感を味わうことができます。

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域に飛び込んで地域の皆様と一緒に汗をかき、考え、そして楽しむ中から、目先の地域貢献活動だけでなく、将来にわたって地域の活性化を担っていく事のできる人材の育成を目指しております。本学の建学の精神は、「幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進」と「地域社会に貢献し得る人材の育成」です。本プログラムは、まさにこの精神を実現するための中核となる教育プログラムであると言えます。

令和3年3月



長岡大学は、文部科学大臣の認証を受けた『公益財団法人日本高等教育評価機構』により、平成28年度大学機関別認証評価を受審し、平成29年3月7日、日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしていると「認定」されました。

はじめに

グラスルーツグローバルゼーション ー草の根・地域からの人類一体化の推進ー



長岡大学教授／ゼミ担当教員 広田 秀樹

広田ゼミナールでは10年以上に渡って、「グラスルーツグローバルゼーション（草の根・地域からの人類一体化の推進）」を大局的テーマに設定し、ゼミ活動を進めて参りました。歴代のゼミ生たちは、その大きなテーマに沿って具体的活動については、大胆に変化させ活動に挑戦し「世界的視野」を身に付けています。本年度は、コロナ禍という特殊な時代環境に直面しました。

全員が先ず、「ゼロベース思考」で今年度の「具体的活動方法」を探ることになり、全員参加の研究発表を活発に行いました。その中で、白熱した議論になったのはやはり、「今年の特異事情」、コロナ禍についてでした。「いくら、人的往来、人的交流という面で、グローバル化が高度化したからといっても、周囲約4万キロという地球のスケールの巨大さを考えたとき、はたしてこんなにも迅速にウイルスが拡散するものなのか?」、「なぜ、医療、衛生、福祉などで、世界の先進を行く西洋諸国家で、こんなにも早期にウイルスが拡散し、社会が深刻化するのか?」など、多様な Why? を考え活発な議論がおき、それ自体がゼミ生にとって深い勉強になりました。

ゼミ生が最も心配するようになったのは、世界的なコロナ禍のなかで、世界の複数の国が激しくぶつかるような方向になっているということでした。本来は、世界で団結して乗り越えるべきなのに、そうならないと実感したのです。ゼミ生は、具体的活動を「コロナ禍の制限された行動環境」のなかで、どう「焦点」をしぼってすすめるかについて検討して行きました。そのなかから、フランスの哲人指導者、ドゴールの姿勢に注目するようになりました。ドゴールは「考えが激しくぶつかる国際社会」にあって、先ず他国への深い「アンタント」こそ大切であると考えた指導者でした。「アンタント」とは、フランス語で「理解」を意味します。理解しようとする姿勢自体が他国への敬意をうみ、国際社会を平和へつなげることになると、ドゴールは考えました。

ここから「地域国際交流から世界史的巨人を学ぶ」という、今年度の具体的活動コンセプトが確立しました。つまり、「世界から地域にきてくださった方」と交流し、その方の母国を深く学ぶ、特に、その方の母国が誇る、世界史的巨人について学ぶことで、その方の母国への敬意をあらわし、世界の平和に貢献する、というコンセプトでした。

「地域国際交流から世界史的巨人を学ぶ」に沿って、ゼミ生は、メキシコ、インド、スリランカ、タイ、アメリカ、韓国、ネパール、中国、ベトナムの9ヵ国から地域にこられた方と、活発に交流しました。そして、9ヵ国の方との交流・対話から発見した「世界史的巨人」について集中学習し、その方の母国の偉大なる巨人を理解し、敬意を表することができたのです。9ヵ国の世界史的巨人とは、メキシコのロブレス、インドのネルー、スリランカのジャヤワルダナ、タイのラーマ9世、アメリカのリンカーン、韓国の金大中、ネパールのビレンドラ、中国の鄧小平、ベトナムのホーチミンといった人物でした。ゼミ生は、「漠然と世界の諸国が思いうかぶ」というレベルから、「世界の一つ一つの国には、独自の歴史的特性とそこで活躍した偉大な巨人がいる」ということを理解するレベルに到達し、また一つ「世界的視野」を広げてくれました。

令和3年3月

広田秀樹
ゼミナール

グラスルーツグローバル化ゼミナール —草の根・地域からの人類一体化の推進—



【参加学生】 23名(4年生9名、3年生12名、2年生2名)

4年生 徐晗、内山雄太、王俊豪、久保田晃平、白井優希、陶锦晔
長谷川侑大、飛田野雄太、尹昊天

3年生 三本真太朗、王懿倫、佐野広樹、鈴木清和、武石大夢、中野琉星
丸山壮史、皆川春輝、Tran Phuong Thao、張貝琪、李思萌、華夏

2年生 張娜、張苗苗

【アドバイザー】

green philosophy (グリーン・フィロソフィー) 代表 大出 恭子 氏
フェアトレードショップ ら・なぶう オーナー 若井由佳子 氏

—本年度の具体的活動テーマ—

「地域国際交流から世界史的巨人を学ぶ」

世界から地域にこられた方
と交流し、その方の母国が誇る
世界史的巨人を学び、敬意
を表明し世界平和に貢献

メキシコのアントニオ氏と交流



ネパールのナミタ女史と交流



交流した方の母国への、深い理
解と敬意の表明

↓
世界平和への貢献

交流した方の母国と世界史的巨人

メキシコ (ロブレス)・インド (ネルー)・スリ
ランカ (ジャヤワルダナ)・タイ (ラーマ9世)・
アメリカ (リンカーン)・韓国 (金大中)・ネパ
ール (ビレンドラ)・中国 (鄧小平)・ベトナム (ホ
ーチミン)、合計9カ国、9人の世界史的巨人

グラスルーツグローバルゼーション
ー草の根・地域からの人類一体化の推進ー

広田ゼミナール

参加学生： 17K020 内山雄太、17K023 王俊豪、17K044 久保田晃平、17K051 小林勇太、17K066 白井優希、17K082 トウキンヨウ、17K093 長谷川侑大、17K095 飛田野雄太、17K301 イコウテン

17K109 三本真太郎、18K018 オウイリン、18K053 佐野広樹、18K060 鈴木清和、
18K069 武石大夢、18K089 中野琉星、18K102 丸山壮史、18K105 皆川春輝、
18K301 Tran Phuong Thao、18K302 チョウカイキ、18K305 李思萌、
18K401 華夏

目 次

1. 全員の研究発表と活動テーマ「地域国際交流から世界史的巨人を学ぶ」	1
2. メキシコのアントニオ氏との交流：世界史的巨人ロブレスを学ぶ	5
3. インドのジョージ氏・シング氏との交流：世界史的巨人ネルーを学ぶ	7
4. スリランカのナヤニ女史との交流：世界史的巨人ジャヤワルダナを学ぶ	11
5. タイのキティワット氏との交流：世界史的巨人ラーマ9世を学ぶ	17
6. アメリカのバーゲット氏との交流：世界史的巨人リンカーンを学ぶ	20
7. 韓国のレンジュン女史との交流：世界史的巨人金大中を学ぶ	23
8. ネパールのナミタ女史との交流：世界史的巨人ビレンドラを学ぶ	25
9. 中国のオウシンギョク氏との交流：世界史的巨人鄧小平を学ぶ	27
10. 見附商工会の平井氏とベトナムのユエン女史との交流：世界史的巨人ホーチミンを学ぶ	30
まとめ	31
謝辞	31

グラスルーツグローバルゼーション

―草の根・地域からの人類一体化の推進―

1. 全員の研究発表と活動テーマ「地域国際交流から世界史的巨人を学ぶ」

―全員の研究発表―



ゼミでは「グラスルーツグローバルゼーション」というテーマをきっかけ、10年以上にわたり、様々な活動を行ってきた。

今年は、世界的なコロナショックにみまわれ、活動が大幅に制限されることになった。具体的な活動については、毎年、自由な研究発表、討論などを経て、大胆に変化させるというのがゼミの伝統だったので、まず全員が自由なテーマで研究を行い、その成果をもとにディスカッションをおこなった。

その中で白熱したのは、全員が注目した「今年の特殊事情」、コロナショックについてだった。

いくらグローバル化したからといって、「地球の大きさ」をかんがえたとき、こんなに短期間に新型コロナウイルスが、全世界にひろがることに、皆が疑問をもった。

わたしたちが最も心配するようになったのは、世界的なコロナショックのなかで、世界の複数の国が、はげしくぶつかるような方向になっているということだった。

本来は、世界で団結して乗り越えるべきなのに、そうならないと実感したのである。ゼミの活動を「制限された行動環境」のなかで、どう「焦点」をしぼってすすめるかについて検討した。

その検討のディスカッションのなかから、フランスの哲人指導者、ドゴールの姿勢に注目するようになった。

ドゴールは「考えが激しくぶつかる国際社会」にあって、先ず他国への深い「アンタント」こそ大切であると考えた指導者であった。「アンタント」とは、フランス語で「理解」を意味する。理解しようとする姿勢自体が他国への敬意をうみ、国際社会を平和へつなげることになると、ドゴールは考えた。

ここから「地域国際交流から世界史的巨人を学ぶ」という、今年の活動コンセプトが確立した。

つまり、「世界から地域にきてくださった方」と交流し、その方の母国を深く学ぶ、特に、その方の母国が誇る、世界史的巨人について学ぶことで、その方の母国への敬意をあらわし、わたしたちなりに世界の平和に貢献する、というコンセプトである。

これまでゼミでは伝統的に、「切っ掛けと集中学習による世界的視野の拡大」を重視してきた。

これは「圧倒的な知識不足を深く認識した反省」からつくられた伝統であった。

つまり、現代は多様で膨大な情報が、文書・ネット等を通じて入手可能であるのに、自分たちの「頭脳に入っている知識」が不足しているという反省からの伝統であった。

「知らないこと」が多すぎることで自体に気がつかないことは、悲劇である。

「知らないことが多いことすら知らない」から「知らないことが多いことを知る」という「無知の知」という水準に、ゼミの先輩は至り、この伝統をつくっていった。

「知らないことがたくさんある」ことを知ったことから、学ぶことへの意欲を湧かせ、徹底して学習していこうというスタンスこそ、ゼミの伝統である。

さまざまな活動という「切っ掛け」を起点にして集中的に学習するという、「切っ掛けと集中学習による世界的視野の拡大」の伝統が、ゼミに確立した。

知識の蓄積・バックボーンが多く豊かにある人間ほど、冷静な正しい判断が下せると、私たちは認識し、この方途を継続している。

今年度も、「地域国際交流から世界史的巨人を学ぶ」にそって、行動、対話、交流する貴重な「切っ掛け」を起点にして、ゼミ生各自が集中的に学習し、ディスカッションを行い、より深く学習するというスタイルを採用した。

ゼミ生が具体的活動を進め、「切っ掛け」となる事項を発見した場合、ゼミ生がそれらについて広範な関連知識を深く調べ、ゼミで報告し、ゼミ生全員で、知識を共有するという形式をとった。

この方法はゼミ生にとって、飛躍的に知識を拡大させ、世界的視野を拡大することにつか

ながった。本年度の報告書は、複数の交流した方等を「切っ掛け」にして、学習した内容を中心にまとめた。

ドゴール

シャルル・ド・ゴール（1890～1970年）は、フランスの陸軍軍人・政治家、第18代大統領になった人物である。

第2次世界大戦で本国失陥後、ロンドンに自由フランスを樹立し、レジスタンスと共闘。1959～1969年の大統領任期中、アルジェリア独立承認、フランスの核武装、北大西洋条約機構・軍事機構からの脱退を進めた。

1890年、ドゴールは、露仏同盟時代リールで生まれる。

ドゴールは、フットボールと詩が好きな少年だった。

1909年、サン・シール陸軍士官学校入学。卒業後は歩兵第33連隊に陸軍少尉として配属。

第1次世界大戦では、大尉としてドイツ軍と戦う。1916年、ヴェルダンの戦いで部隊を指揮。1916年3月、ヴェルダンのドゥオーモン要塞付近で捕虜となった。

ドゴールは、インゴルシュタット第9要塞捕虜収容所、ドイツ中部クロナッハのローゼンベルク捕虜収容所、ヴァイセンブルク近郊のヴェルツブルク捕虜収容所などを転々とした。

この間5回も、ド・ゴールは脱走したが、そのたびに連れ戻された。その後、終戦を迎えた。

第1次大戦後、ポーランドの軍事顧問となり、同国へ赴任。

当時ポーランドは革命ロシア赤軍の侵攻を受けており、首都ワルシャワまで迫られていた。

ドゴールはこの戦いで活躍し、「ポーランド軍少佐」の称号を得て、ポーランド政府から勲章を授与された。

1921年、ドゴールはフランスへ帰国。サン・シール陸軍士官学校の軍事史担当教官になった。

1932年、ドゴールは中佐となり軍事最高会議事務長に就任。1934年、『機甲化軍にむけて』、1938年『フランスとその軍隊』を執筆。

1939年9月、第2次世界大戦が勃発。

1940年5月、ドイツ軍のフランス侵攻が始まった。「マジノ線」をドイツ軍は機動力のある装甲部隊で迂回し、フランス軍はわずか1か月で敗北。

開戦直後の5月15日、ドゴールは第4機甲師団長に任命されていた。戦車の集中運用を行った。ソンム県アブヴィル近辺の反撃では、ソンム川南岸の敵橋頭堡3つのうち2つまでを取り返した。

1940年6月、同年3月のエドゥアール・ダラディエの辞任により新たに首相に就任したポール・レノー率いる新内閣の国防次官兼陸軍次官に任命され、フランス軍史上最年少の49歳で少将となった。

ドイツ軍によるフランス侵攻に対するイギリス軍の協力を得るためロンドンに飛び、チャーチル戦時内閣と交渉を開始した。

1940年6月15日、首都パリが陥落。

やむなく、ドゴールは、イギリスへ召還された連合軍顧問の英陸軍将校スピーアーズ将軍に同伴して亡命することを決断。

その後ロンドンで、亡命政府「自由フランス」を結成。

ラジオを通じて、対独戦の継続とヴィシー政権への抵抗を、フランス国民に呼びかけ、鼓舞した。

第2次大戦後、フランス大統領になった。

過酷な戦争体験は、ドゴールに平和の重要性を深く認識させていた。

フランス側の確実な抑止力、「他国を信用しきらない」ような冷厳な外交姿勢をとる一方で、信頼醸成措置としての国際理解、アンタントについてもよくよく認識し、行動した。

2. メキシコのアントニオ氏との交流：世界史的巨人ロブレスを学ぶ

ーメキシコから来られたアントニオ氏ー



メキシコからこられた、アントニオ氏と交流した。アントニオ氏は、メキシコの歴史、文化、国際関係など、幅広く熱心に解説してくれた。

わたしたちが驚いたのは、いまのアメリカのカリフォルニア・アリゾナ・ニューメキシコ・テキサス・ネバダといった、米国の西南部のほとんどの領域が、実はアメリカ領ではなく、もとはメキシコ領だったという史実だった。

アステカとよばれた帝国のパワーの伝統、その後の「世界大国スペイン」がはいつてきた歴史的背景、歴史的な特性から、メキシコが北米で圧倒的なパワーを、もっていたことを理解した。

アントニオ氏との交流が切っ掛けで、メキシコに強い親近感が湧き、メキシコについて、集中的に学びはじめた。

その中で、メキシコの世界史的巨人、ロブレスに注目した。

ロブレスは、世界の核兵器が急増した 1960 年代、核廃絶運動に挑戦した指導者である。

ロブレスは、ラテンアメリカ、カリブ海の多くの国を必死で説得し、「ラテンアメリカ・カリブ海核兵器禁止条約（トラテロルコ条約）」の成立を実現した。

1982 年、ノーベル平和賞を受賞した。

アルフォンソ・ガルシア・ロブレスは、メキシコ・ミチョアカン州のサモーラ・デ・イダルゴで生まれた。

メキシコ国立自治大学、フランス・パリ高等国際問題研究所、オランダ・ハーグ国際法アカデミー等で学び、1939年にメキシコ外務省に入省。

1945年、サンフランシスコで行われた国際連合設立会議に代表として参加。

1962年から1964年までブラジル大使。

1964年から1970年まで外務大臣秘書官。

1971年から1975年国連大使。

1975年から1976年外務大臣として、メキシコ外交を担った。

1977年から、ジュネーブに本部を置く軍縮委員会のメキシコ常任代表を務めた。

世界の状況をよく理解していたロブレスの「ライフワーク」は、核軍縮、核廃絶にあった。背景には、1962年のキューバ危機によって、核戦争の発生の危機を、世界が体験し、その後も、核戦争への高い警戒感、緊張感の高まりが、国際社会で発生していたことがあった。

「非核化構想」を、メキシコのアドルフォ・ロペス・マテオス大統領が提案する中、ロブレスは、「ラテンアメリカの非核化地帯に関する協定」をつくる上で重要な役割を果たし、奔走した。

ラテンアメリカ33ヵ国で、「核兵器の実験、使用、製造、生産、貯蔵、配備を全面的に禁止」することを目的とした条約案ができていった。

ついに、1967年、ラテンアメリカとカリブ海の非核化を決定付けた、「ラテンアメリカ・カリブ海核兵器禁止条約（トラテロルコ条約）〈Treaty for the Prohibition of Nuclear Weapons in Latin America and Caribbean〉」が成立した。

ロブレスは、「トラテロルコ条約の父」と呼ばれた。

1982年、ロブレスにノーベル平和賞が贈られた。

3. インドのジョージ氏・シング氏との交流：世界史的巨人ネルーを学ぶ

—インドから来られたジョージ氏・シング氏—



インドから来られたジョージ氏・シング氏が本場のインド料理を提供しているお店を、訪問し交流を深めた。

「ビリヤニ、ティッカ、タンドリーチキン、ナン、ケパブ、チャイ」といった、インド料理を、一つ一つ確認しながらたべることで、インドへの、親近感がわいてきた。

ジョージ氏・シング氏は、デリーから来られた方で、インドのことについてはなしをしてくれた。

そのなかで、インドの人が尊敬している、ネルーという世界史的巨人のことを聞き、興味が湧き、みなで学びはじめた。

ネルーは、『ヒューマニスト、非暴力主義者、絶対平和主義者』である、あのマハトマ＝ガンジーの門下生で、全世界の「人間の共生」を志向した哲人政治家である。

ネルーは、パワーのある大国が他国を支配するような、「植民地主義」に反対し、世界における、人間、民族、国家の平等を訴えつづけた。

米ソという、圧倒的にパワーがある2つの超大国が、世界にはばをきかせた冷戦時代にあつて、ネルーは、大国ではない、多くの他の国の偉大さをせんようし、世界から絶大な尊敬をかちとった。

ネルーの行動は、「第3世界」という、『米ソ以外の強力なエネルギー』を、国際社会に、つくった。

ネルーはカーストの高い裕福な家庭に生まれた。

ネルーはイギリスに渡り、名門ハロー校に入学。その後、ケンブリッジ大学で学ぶ。大学卒業後、弁護士の資格を取得して帰国。

ネルーは当時のインドで、「インド独立運動」に走った。マハトマ・ガンディーやスバス・チャンドラ・ボースなどと共に、イギリスからの独立運動を指導する人物になっていった。

ネルーは、当初スワラージ党という政党を結党していた。しかし、1929年、父モティラル・ネルーから、国民会議の議長の座を引き継いだ。

その後、ネルーは1936年、1937年、1946年、国会議員の議長に選出された。

一方、その間、何度か投獄を経験。投獄という逆風の環境にあってもネルーは、負けなかった。闘った。投獄が続く時代、ネルーは数冊の著書を完成させた。

第2次大戦後、1945年から46年にかけて、インドでは選挙が実施された。

この時期、日本軍に戦争協力をし、反逆罪として逮捕されたインド国民兵士の裁判が行われた。そのとき、ネルーはその兵士たちの無実を訴えた。

国民会議派は、この選挙において勝利した。

一方、ムスリム選挙区において、全インドムスリム連盟が議席を独占して、事実上の2大政党となった。

インドにおける、ヒンズー勢力とイスラム勢力の共存は、完全には軌道に乗らなくなっていった。

1946年、暫定政府が成立し、ネルーは首班となったが、両派の対立は好転しなかった。

1947年、インドとパキスタンは分離し、独立していった。

首相に就任したネルーは、側近にヒンズー主義寄りのヴァッラブバーイー・パテール、法相には不可触民出身の反カースト運動指導者であるビームラーオ・アンベードカルを任命するなど、左右両派から広く人材を集めた。

ネルー政権の大きな最初の課題は、独立時の混乱により生まれた、大量の難民への対応にあった。

独立後の混乱の中、インドと世界の偉大な指導者であった、マハトマ・ガンディーが暗殺された。

それをきっかけにし、インドの国民会議派はネルーと副首相であるパテールの2人指導者による体制になった。

ネルーとパテールは考え方や育ちなど、様々な背景がちがった。

しかし、1950年、パテールが死亡した事により、事実上、ネルーは党内の指導権を確立した。

ネルーは、インド憲法の制定を進めた。

憲法起草委員会の議長には法相のアンベードカルが就任した。

インド憲法は1949年11月26日、憲法制定議会で成立し、1950年1月26日に施行された。この憲法では、普通選挙制の導入、基本的人権の尊重、議院内閣制などが定められた。

普通選挙制の導入で、民主主義を維持、堅持し、インドは世界最大の民主主義国家になっていった。

元来、ネルー政権の「中心思想」には、「社会主義と宗教間融和」があったといえる。当時の膨大な貧困層の人口をかかえたインドにあっては、強力な政府が経済、社会を主導し発展を目指すような、1950年代の「ソ連型・社会主義型」の発展戦略が、有効ともみえた面がある。「開発独裁型・準開発独裁型の発展戦略」へのあこがれともいえた。

一方、確かに、インドは明確に、自由民主国家として、国民の多数を占めるヒンズー教と、それ以外のムスリムやシク教徒などを、寛容に受け入れる方向性を形成していった。

インド・パキスタンの分離独立時に、大量の難民が発生した惨事の背景から、宗教間融和は基本的に歓迎された。

ネルーが率いたインド国民会議は、全国政党であり、政治に、左派から右派まで、幅広く支持基盤を持つ組織だった。

ネルーは、高い理想に基づき政治を進め、その「立ち振る舞い」から、ガンディーに勝るとも劣らないカリスマ性を、国民に実感させた。

ネルー時代の国民会議派は、選挙で勝利し続けた。ネルー時代のインドは、事実上の一党優位政党制国家となった。

実際、ネルーが死亡するまで政権交代がおこる事はなかった。

ネルーは独立時に首相と兼任で外務大臣に就任し、以後もその死まで兼任を続け、常にインド外交の中心的な方向性を決めた。

パキスタンとの関係は常に課題であり続けた。

それ以外で、外交上の課題になったのはイギリス連邦との関係であった。

ネルーは、インドが共和制を志向すると同時に、イギリス連邦との関係の維持を求めた。結果として、共和制でありながら、英連邦にもとどまることになる。

ネルー外交の最大の偉業とは、国際的な非同盟・中立外交の推進にある。

1950年、インドは、中華人民共和国を、非共産圏ではビルマに次いで国家承認し、最初に大使館を設置した国となった。

1954年、中華人民共和国の周恩来と共に、「相互不可侵、内政不干渉、平等互恵、平和共存」の「平和五原則」を、世界にアピールした。

同年10月、訪中し毛沢東と会談した。

1955年、ネルーは「第三世界」の中心的指導者として、周恩来、インドネシアのスカルノ、エジプトのナセルと共に、アジア・アフリカ会議（バンドン会議）を開催した。

バンドン会議は、「反帝国主義・反植民地主義」を訴え、「平和五原則」を拡充させた「平和十原則」を、世界にアピールした。

しかし一方、「インドと中国は兄弟」という考えを掲げ、ネルーが接近した中国であったが、ダライ・ラマとチベット亡命政府をインドが支援したことから、中国との関係は変化し

た。

1962年、中印国境紛争が勃発した。

1964年、ネルーは首相在任中に、心臓発作で逝去した。

大闘争家ネルーの「闘いながらの死」であった。遺体は火葬され、墓として、シャンティ・ヴァナが建立された。

グルザーリーラール・ナンダーが、首相代理となった。その後、ラール・バハードゥル・シャーストリーが、正式に後継首相に選出された。

1966年、シャーストリーは急死。ネルーの娘、インディラ・ガンディーが首相に就任した。インディラ・ガンディーという名前は、マハトマ・ガンディーからつけられたものであった。ネルーがマハトマ・ガンディーの事を、生涯尊敬していたことが、理解できる。

現在の大インドの底流に、マハトマ・ガンディー、ネルー、インディラ・ガンジーという、『師弟の精神性の流れ』を、感じる人も多い。

4. スリランカのナヤニ女史との交流：世界史的巨人ジャヤワルダナを学ぶ

ースリランカから来られたナヤニ女史ー



スリランカからこられたナヤニ女史と交流した。

ナヤニ女史は、「あーゆーぼーわん」というお店を経営されている。

「あーゆー」とは、スリランカのことばで「生命力」を意味することをおそわった。

ナヤニ女史のお話しをうかがうなかで、生きるうえでもっとも大切なものは「生命力」だということを理解した。

「どんなことがあっても、たくましく生きようという生命力」がなければ、経済的、物質的に、ゆたかになっても、幸福にはなれない、と悟った。

ナヤニ女史との交流がきっかけで、スリランカのことを学びはじめた。その中から、ジャヤワルダナという人物を知り感銘を受け、学びはじめた。

ジャヤワルダナは、世界で、人間の共生、人間思いの政策を訴えほんそうした、指導者で、スリランカの第2代大統領になった方である。

第2次大戦後、日本が国際社会に復帰する、1951年のサンフランシスコ講和会議の場で、「憎しみは憎しみでは消えない。慈愛によって消えるのです」と、日本の国際社会への復帰

を、全力で応援するスピーチをしてくれた。

ジャヤワルダナは、自分の死にさいして、自身の目のかくまくを、一つはスリランカの人に、もう一つは日本人にあげてほしいと遺言をのこすほどに、生涯他者へつくす姿勢をつらぬいた。

ジャヤワルダナは、11人兄弟の長男として、セイロンの最高裁判所判事の息子として生まれた。

ロイヤル・カレッジ・コロomboで学んだ。クリケットの選手として活躍したこともあった。

ジャヤワルダナは、キリスト教から仏教に改宗し、コロombo法科大学で優秀な成績を修めて法律家となった。

1938年、セイロン国家機構の活動家となった。

1946年、国民連帯同盟へ加入。

1947年に初代蔵相として入閣。

1951年には国際連合に蔵相として参加。このとき、1951年9月6日、サンフランシスコ講和会議にセイロン代表として出席し、演説したとき、ジャヤワルダナは「日本の掲げた理想に、独立を望むアジアの人々が共感を覚えたことを忘れないで欲しい」と述べた。

そして、「憎悪は憎悪によって止むことはない。慈愛によって止む」と述べ、セイロンは日本に対する戦時賠償請求を放棄すると、宣言した。

1977年、スリランカの建国に貢献。

姓のジャヤワルダナは「勝利をもたらす」を意味する。

1983年、スリランカの首都をコロomboから古都コッテへ遷都するにあたり、コッテがかつてジャヤワルダナと呼ばれていたことに加え、彼自身の名前の意義もこめて、「スリジャヤワルダナプラコッテ」と改称の上、遷都された。

ジャヤワルダナが日本と初めて接点を持ったのは、1921年3月、当時皇太子であった昭和天皇を乗せた戦艦香取がヨーロッパ遠征の途中でスリランカに寄港したときだった。

当時15歳だったジャヤワルダナ少年は、皇太子のお召艦を一目見ようと、港に向かったという。このエピソードは、1979年訪日時に、語られた。

ジャヤワルダナは、閣僚・首相・大統領として、たびたび訪日した。さらに、政界引退後も日本を訪れている。日本の仏教関係者をスリランカに招待するなど、日本とスリランカの交流に尽力した。

1989年、昭和天皇の大喪の礼には、本人の希望により、プレマダーサ大統領に代わって参列。

肩書きは「前大統領」だったが、元首級参列者・大統領同格の国賓として、接遇された。

1991年、日本の仏教関係者の招待で広島市を訪れ、広島平和記念資料館を見学。

1996年、逝去した。

スリランカの国旗に描かれた剣を持ったライオンは、この国のシンハラ王朝以来のシンボルである。

四隅に描かれたポダイジュの葉は、スリランカ人の70%を占める仏教徒を表している。また左側にある緑はイスラム教。オレンジはヒンズー教をそれぞれ表している。

スリランカの正式名称は「スリランカ民主社会主義共和国」である。首都は「スリジャヤワルダナプラコッテ」。18世紀に、完全にイギリスの植民地となった政治は共和制を敷いており、大統領制と議員内閣制が混合した体制となっている。国会は、一院制をとっている。

スリランカの1人あたりのGDPは3162ドル。セイロンティーを初めとする紅茶やゴム、コーヒー、砂糖などの農産物の生産・輸出は、いまだにスリランカにおいて重要な生産・輸出である。

近年は、食品加工や電気通信、金融といった分野の重要性も増加している。

GDPは2005年からの5年間で2倍と成長した。

スリランカの最初の人類文化は、バランゴダの遺跡からわかる。

バランゴダ人は、およそ3万4000年前にこの島に到着した。

当時の人類は、洞窟の中に住み、狩猟・採集の生活をしていたケースが多いと、推察される。

紀元前483年、シンハラ人の祖とされるヴィジヤカ王子がスリランカに上陸し、アヌラーダプラ王国を作ったとされる。

紀元前3世紀、アショーカ王の王子マヒンダが仏教を伝えたとされる。

これ以降、テーラワーダ仏教を主体として、仏教が興隆した。シンハラ人の多くは、現在までその信仰を守ってきている。

その後、南インドからタミル人を主体とする移住者が、現在のスリランカを形成していく。

最初にスリランカを訪れたヨーロッパ人は、ポルトガル人。1505年、スリランカが7カ国割拠の状態にあることを発見した。

1517年、ポルトガル人はコロンボに拠点を作った。次第に統治を沿海地区に拡大した。

1602年、オランダ人が上陸。

1656年、オランダは、コロンボを占領。1658年にジャフナーパトナム近くの最後のポルトガル拠点を占領した。1660年まで、内陸のキャンディ王国以外の島全体を支配した。なお、オランダはプロテスタント国家。ポルトガルはカトリック国家であった。

1796年、イギリス人が、海岸地区を制圧。1803年、イギリスは初めてのキャンディ戦争でキャンディ王国に侵入。最後に撃退された。

1815年、キャンディ王国は第2次キャンディ戦争後に占領された。ここに、スリランカの独立が終わった。

—スリランカ料理：パラタランチー—



—スリランカ料理：ビリヤーニー—



—スリランカ料理店・あーゆーぼーわんの店内—



5. タイのキティワット氏との交流：世界史的巨人ラーマ9世を学ぶ

—タイから来られたキティワット氏—



タイからこられたキティワット氏と交流した。キティワット氏は、とてもあかるい方で、悩みがあっても忘れてしまう、消してしまうような方で、わたしたちは圧倒的な明るさにひきこまれた。

キティワット氏が、タイのラーマ9世（プーミポン王）をとても尊敬していることをしり学びはじめた。

ラーマ9世は、タイの王族に生まれるという幸運にあっても、若き日から指導者としての使命感を自覚した方であった。

ラーマ9世は徹底した現場主義のリーダーで、つねに国民のなかに果敢にとびこみ、対話し、励まし、タイをよくするため手をうちつづけ、タイの人々から絶大な尊敬をえていった名君である。

1997年のアジア通貨危機で、経済が崩壊する中、ラーマ9世は、まわりばかりきにして、過度に無理をして自分をうしなうような「強欲資本主義」のありかたをやめ、それぞれが、

自分らしく、その国らしく、適切なペースで生活して、経済を回して行くという、「足るを
する経済（セータキットポーピーアン）」を提唱し、世界の注目をあつめた。

ラーマ9世は、チャークリー王朝第9代目のタイ王国の国王。

1927年12月5日、アメリカ・マサチューセッツ州ケンブリッジで生まれる。

実兄ラーマ8世の早逝により、第2次大戦後、1946年18歳で即位。2016年に逝去。約
70年間王位に在位した。若き日に、スイスのローザンヌ大学で学ぶ。

国王として本格的に活動し始めたのは、1952年以降。

ラーマ9世は、進んで地方巡業におもむき、産業復興に力を注いだ。

1960年代から1970年代にかけて、世界的な植民地・保護領独立の趨勢や共産主義の波
及を受け、ベトナムやカンボジアなど東南アジア諸国が混乱に陥った時代、ラーマ9世は
表だった政治行動は避けつつ、軍政と市民運動に対して硬軟両様で対応した。

やがて、タイが東南アジア諸国連合において重要な地位を占め、経済力が上昇すると、ラ
ーマ9世は、国内政治に対して直接の干渉をせず、官僚・軍部など利害関係の調停役として
活躍し、困難な情勢の打開収拾に手腕を見せるスタイルをとっていった。

1992年の「暗黒の5月事件」は、象徴的な事件であった。

当時対立していたスチンダ首相とチャムロン都知事の双方を王宮に呼びつけた。

この時期、タイ王国政府の武力弾圧によって、バンコク内などが流血の事態に陥っていた。
タイ王国軍を背景にするスチンダ首相と、民主化運動グループの民間人指導者チャムロン
を、ラーマ9世は玉座の前に正座させた。

「そんな事でタイ国民のためになると思うのか！いい加減にしろ！」と叱りつけ、騒乱を
一夜にして沈静化させた。

この「政府と民主化グループを調停・仲裁する映像」は、世界に配信され、王の絶大な政
治的影響力を世界に示した。

ラーマ9世自身の政治的な成熟を見せつけ、権力のバランスとしての側面を強調する
シーンだった。

この結果、スチンダ内閣は解散し、同年の選挙以降、タイ王国は水準を上げた民主主義体
制に移行していった。

2016年6月9日、在位70年を迎え、存命中の最も在位年数の長い君主となった。在位
70年を祝う記念行事が執り行われたが、国王本人は入院中だった。

入院している病院の周りには、タイでは健康と長寿を意味する色であるピンク色の服を
着た人々が集まり、手を合わせ、国王の平癒を祈っていった。

1997年、バーツ安に見舞われた「アジア通貨危機」。

タイ王国の経済も、危機に直面した。このとき、ラーマ9世は、発展・成長の適切性、自
立的・持続可能な経済を目指すよう提案した。

「セータキットポーピーアン（足るを知る経済）」の提唱であった。タイ人の生活・行動に大きな影響を与えた。

王自身、率先して、「軸を足して使い込まれた鉛筆」や「使い切った歯磨き粉のチューブ」などをみせ、質素儉約のライフスタイルを、自ら実践し、国民に「足るを知る生活」を呼びかけた。

6. アメリカのバーゲット氏との交流：世界史的巨人リンカーンを学ぶ

—アメリカから来られたバーゲット氏—



アメリカからこられた宣教師、バーゲット氏と交流した。バーゲット氏は、アガペー聖書バプテスト教会を運営されている。

アガペーとは、ギリシア語で「無条件の愛」ということを教わった。

バーゲット氏の、無条件に全ての人をはげまし、光をあてようとする、人間としての振る舞いに感銘した。

バーゲット氏がリンカーンを尊敬していることを知り、リンカーンについて学習した。

リンカーンは奴隷制度が当然とすら信じられていた時代、人間の平等性を訴え、奴隷解放宣言をだした第16代大統領である。

ゲチスバーグでの「民衆の民衆による民衆のための政治」は、アメリカと世界に、政治や社会の中心は、民衆であって、一部の権力者では絶対にならないという、デモクラシーを不滅にしたスピーチはあまりに有名である。

エイブラハム・リンカーン（1809年～1865年）は、アメリカ合衆国16代大統領（1861年3月～1865年4月）になった世界史的巨人である。

ケンタッキーの田舎の丸太小屋で誕生。

若き日から、貧しいなか学問に挑戦し、また、川船乗り、製粉業、郵便局などで、必死に働いた。

1834年、ホイッグ党議員としてイリイノ州議会の議員に当選。

1846年、連邦下院議員に当選。

アメリカ・メキシコ戦争においては、戦争反対の演説をする。当時、戦勝に湧く世論から、非愛国的姿勢と批判され、政界から離れることになった。

その後、10年間、イリイノ州スプリングフィールドで弁護士として活躍。生来の正義感から、全ての人に対して、真剣に弁護に取り組み、「正直者エイブ」と呼ばれた。

1850年、アメリカでは、北部と南部において、「奴隷制を拡大するか・阻止するか」が、論点になり対立。

1851年、ストーの『アンクル＝トムの小屋』により、奴隷制反対運動が台頭した。

『アンクル＝トムの小屋』は、ストーの小説で、1851～52年、奴隷制廃止運動の機関紙『ナショナル・イアラ』に連載された。

一方、1854年、「カンザス・ネブラスカ法」が成立し、奴隷拡大派も勢いをつける。

「カンザス・ネブラスカ法」とは、1854年ルイジアナ購入地域の中にカンザス・ネブラスカ準州を設けることを決めた法律で、準州に奴隷制度を認めるか否かを、住民の選択に任せた法律。

これを背景にして、奴隷制度拡大を恐れた人々により、共和党が結成され、南北の対立を激化させる契機となった。

さらに、1854年の「ドレッド・スコット判決」も、奴隷制度維持を勢いづけた。これは、黒人奴隷ドレッド・スコットに対するアメリカ連邦最高裁判所の判決であった。

スコットは主人が自由州イリイノイや奴隷制度を禁止されたミネソタに移住したことから、自分と家族は自由の身だと提訴した。

裁判は合衆国西部に拡大しつつある奴隷制度に決着がつくとして注目された。しかし、R. トーニーを長官とする最高裁は、「連邦憲法は黒人を市民として認めておらず黒人に提訴権はない。自由州に住んだとしても黒人は自由ではない」と、南部に有利な判決を下した。

当時、リンカーン自身は、奴隷制に反対であった。

リンカーンは、奴隷制拡大の勢いを憂慮し、政界に復帰。共和党に入党。

リンカーンは、黒人奴隷制度拡大に反対する論陣を張る。その中で、力量を注目され、共和党から大統領候補に指名され、第16代大統領に当選した。

リンカーンの大統領就任に対し、南部諸州は反発。

1860年12月、分離を決定。

1861年2月、南カロライナ・ミシシッピ・フロリダ・アラバマ・ジョージア・ルイジア

ナ・テキサスの7州の代表がモントゴメリーで会合を開き、「大統領」にジェファソン＝デイヴィスを就任させ、「アメリカ連合国」を発足させた。

「アメリカ連合国」の首都は当初、モントゴメリーに置かれたが、リッチモンドに移動した。

南部の綿花プランテーション地帯の大プランター（農園主）の支持を受け、黒人奴隷制度拡大・自由貿易主義（綿花のイギリスへの輸出拡大）・反連邦主義（州権主義・北部主体の連邦主義に反対）を共通理念とした「アメリカ連合国」は、激しい南北戦争を引き起こした。

1861年4月、南北戦争へ突入。

当初、戦争は南部が優勢だったが、1862年1月のホームステッド法により、西部農民の支持を得て、形成逆転へ。

ホームステッド法とは、1862年リンカーンが公布した法律。

21歳以上の者に対し男女問わず、外国人でもアメリカ市民となる意志を示せば、160エーカーの公有地の貸与を請求できるといった西部の農民創出法。

請求した者は、貸与された土地に、一定の改良を加え5年間定住することで土地の完全な所有権を得ることができた。

これにより、西部開拓が進み、移住者が増えた。

また、北部は、「奴隷制度廃止・黒人奴隷解放」を明確な戦争目的として掲げ、国際世論の支持を勝ちとっていった。

リンカーンの、1863年の「奴隷解放宣言」のインパクトは大きいものだった。

リンカーンは、「反乱中の州の奴隷をすべて自由とする。解放された黒人への暴力を慎むこと。適切な賃金で働いてもらうようにすること。連邦軍隊に参加する機会を与える」などと宣言した。

正式にアメリカで奴隷制度が廃止されたのは、1865年発行の憲法修正第13条となる。1863年11月、リンカーンは、有名な「民衆の、民衆による、民衆のための政治」という演説を行った。その後、大統領に再選された。

1865年4月、南北戦争は、南部の降伏により終戦。

「アメリカ連合国」は解体した。

南北戦争は、4年間で約400万人の将兵が戦いに参加し、南北の死者は計62万人（北軍約36万人 南軍約26万人）。

この戦争は史上初めて、工業力・鉄道・電通が勝敗を決めた近代戦争と言われており、連発ライフル・手動式機関銃・甲鉄艦・潜水艦等が戦争において初めて実戦投入された。

1865年4月14日、リンカーンは、熱狂的な南部派の俳優ジョン＝ブースによって暗殺された。

元来、アメリカの黒人奴隷制度は、労働力不足に悩む南部の植民者達が先住民の奴隷化に失敗したことから始まっている。

当初、「白人年季契約奉公人」と呼ばれる「白人不自由労働者」の制度もあった。

1600年代後半、バージニア・メリーランドで、タバコ産業が急成長し、白人奴隷の価格が高騰。

これ以降、南部プランターが「白人年季契約奉公人」より安価で安定性のある労働力を必要とする背景から、アフリカ人奴隷貿易業も動き、黒人奴隷が急増し、黒人奴隷制度がアメリカ全土に広がった。

7. 韓国のレンジュン女史との交流：世界史的巨人金大中を学ぶ

韓国のソウルからこられたレンジュン女史と交流した。

レンジュン女史から、「サムギョッサル、トック、ナムル、チジミ」など、本場のコリアンフードを食べさせていただき、ティストのレベルの高さ、独自性にとっても感動した。

レンジュン女史との交流が切っ掛けとなり、韓国のことを学ぶようになった。

その中で、私たちが最も注目した人物は、2000年にノーベル平和賞を受賞した、金大中（キムデジュン）という民主の大指導者であった。

金大中は、第2次大戦後の南北分断、内戦、開発独裁政治の中、一貫して韓国の平和、民主、安定、発展を願って闘いつづけた『民主と対話』の指導者である。

政敵による拉致、暗殺未遂、亡命など。壮絶な労苦と危機が、金大中の人間としての本物の強さをつくったことを、学んだ。

金大中・第15代大統領（1998～2003年）は、1924年、全羅南道の荷衣島現在の全羅南道新安郡荷衣面に生まれる。

慶熙大学大学院修了。

1954年、総選挙で国会議員に初挑戦するも落選。

当時の李承晩大統領の政策に反対する姿勢で活動。

1959年、1960年と立て続けに落選を経験。

1961年、補欠選挙で国会議員に初当選。しかし、朴正熙による軍事クーデターにより無効となった。

1963年、1967年、国会議員選挙で連続当選。

1970年、新民党の大統領候補に指名された。

1971年大統領選では、現職の朴正熙に97万票差にまで迫った。

以後、「朴正熙の政敵」として狙われるようになる。大統領選の直後には交通事故を装った暗殺工作に遭い、股関節の障害を負った。

1973年8月8日、東京滞在中、ホテルグランドパレスで、拉致され行方不明となった。犯人たちは、韓国中央情報部（KCIA）工作員であった事が後に判明。

拉致後、神戸から出港した工作船の上で、殺害される直前、日本の海上保安庁のヘリコプ

ターが船の上を旋回し、照明弾などで威嚇。

殺害は中止。その後、ソウルで解放された。

1979年10月26日、朴正熙暗殺事件が起きる。

民主化の機運が高まってソウルの春が訪れ、韓国政界で金大中、金泳三、金鍾泌の3人のリーダーが注目される、いわゆる三金時代が始まった。

1980年2月、金大中は公民権を回復。政治活動を再開するが、3ヶ月後の1980年5月、再び逮捕。

これが原因となって、光州で起きた民主化要求のデモが拡大し、軍部が武力鎮圧し、流血の大惨事となった。

その後、金大中は米国に亡命した。

1985年2月、亡命先の米国からの帰国を強行。

16年ぶりに直接選挙制で行われた大統領選挙で、軍人出身の盧泰愚に挑む。

金泳三と分立したことが文民勢力の分裂を招いて敗北。

しかし、金泳三と金大中の得票率の合計は55%で、当選した盧泰愚の36.6%をはるかに上回った。

1992年にも金泳三、鄭周永らを相手に大統領選を戦うも、再び敗北。

1997年大統領選挙で、ついに当選。大統領に就任したのはアジア通貨危機の直後。経済的な危機は続いていた。

金大中政権は、IMFの介入を全面的に受け入れ、経済改革に着手。IT産業奨励やビッグディール政策をもって経済建て直しを図った。

危機を脱した韓国は内外からIT先進国と呼ばれるようになり、サムスン電子や現代自動車の世界市場での地位を高めた。

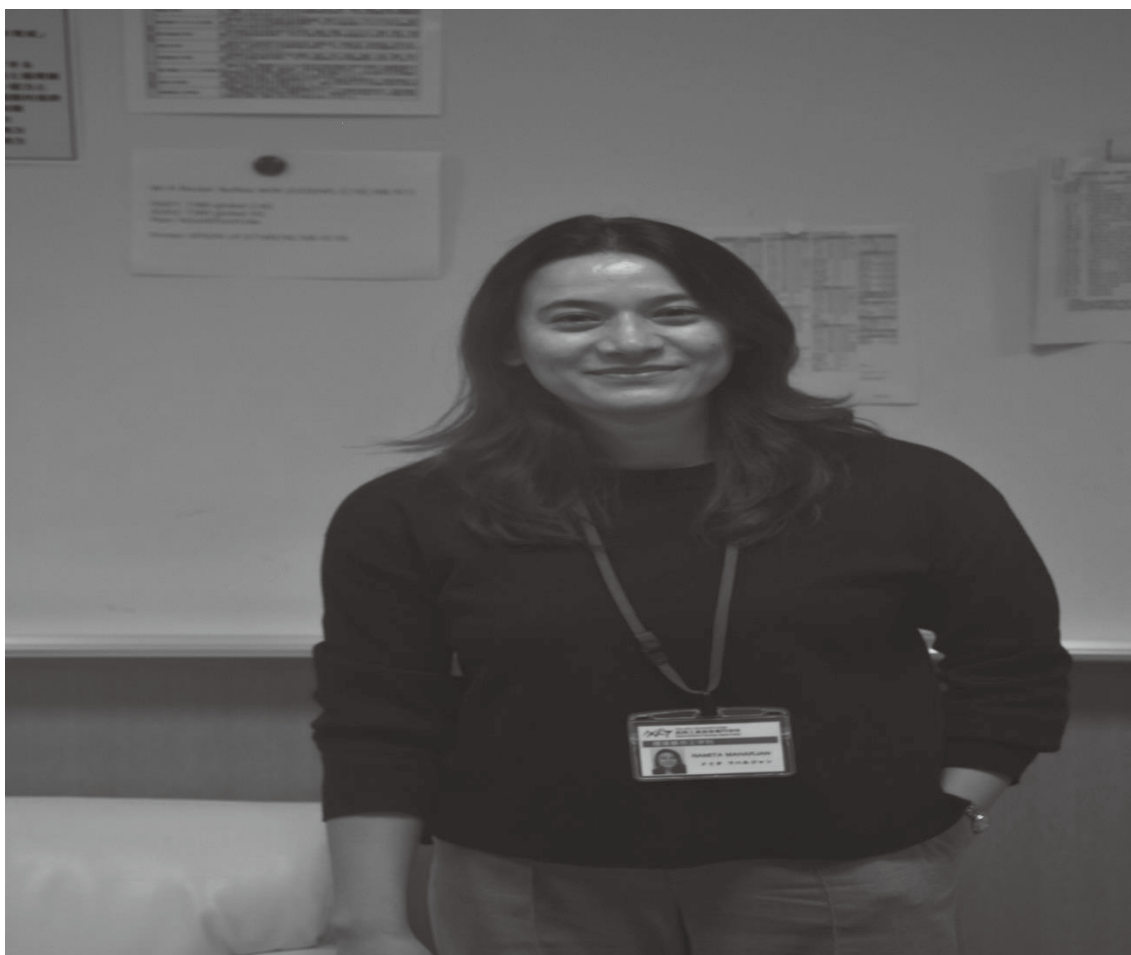
しかし一方、急激な産業構造の転換は貧富の格差の増大などを招いた。そのため、医療保険や年金など福祉政策の拡充にも重点を置いた。

1998年、小渕恵三首相と日韓共同宣言を発表。韓国でそれまで禁止されていた日本文化開放を推し進めた。

朝鮮民主主義人民共和国に対しては、「太陽政策」と称される緊張緩和政策を志向した。2000年6月、朝鮮民主主義人民共和国の首都平壤で、金正日国防委員長との南北首脳会談を行う。6.15南北共同宣言を締結した。南北首脳会談などが評価されて、ノーベル平和賞を受賞した。

8. ネパールのナミタ女史との交流：世界史的巨人ビレンドラを学ぶ

—ネパールから来られたナミタ女史—



ネパールからこられたナミタ女史と交流した。

ナミタ女史と、ネパールと日本の文化の比較、ネパールと日本の関係、ネパールからみた日本のすがたなど、多くのことを語りあった。

インタビューを通してネパールのさまざまな文化などについて知り学ぶことができた。服装の面ではサリーという民族衣装を着ている。

食の面では、よくカレー・ご飯を食べている。

住居の面ではネパールでは、レンガやコンクリートの建物が多く、その色もさまざまな色がありオシャレなものが多い。

ネパールには寺が多く存在し、京都みたいな所だとお聞きした。

寺は日本のものとは形が異なり、ドーム状であるとお聞きした。

衣・食・住の文化を日本と比較するなど、世界には多様な異なる文化があり、他の国の

文化について学ぶことが、これほど新鮮なものなのかと体験し、感動した。

この交流がきっかけで、ネパールについて、より詳しく学習した。

わたしたちは、ビレンドラに、注目した。

ビレンドラは、イギリスのイートンカレッジ、アメリカのハーバード大学で学んだ、国際派、知性派。

1975年、ネパール王になり、1980年代末からの世界的な民主化の嵐のなかで、国民の生活の安定を第一に考え、行動する。

1990年、ビレンドラは新憲法を公布させ、「絶対君主制」から「立憲君主制、民主制」へ、ネパールをソフトランディングさせることに成功。

世界的な名君として評価された。

1945年、ネパール王マヘンドラ・ビール・ヒクラム・シャハの息子として、ビレンドラは生まれた。

ビレンドラは、イギリス・イートンカレッジ、アメリカ・ハーバード大学で学ぶことになる。

ビレンドラは日本でも学んだ。

1967年、東京大学に留学した。その際、ビレンドラに熱海の植物友の会が桜と梅の種を献上。

ハーバード大学では、政治学を学んだ。

ビレンドラは、豊富な留学、海外渡航経験から、世界的視野をみにつけた。

1975年、ネパール王となる。

1990年、民主化を求め国民の声が高まったとき、パンチャーヤト政を廃止。

パンチャーヤト制度は、父のマヘンドラが定めたものであった。

パンチャーヤト制度は、元来、伝統的な地方制度であった。

簡単に言うと、「村の中で尊敬されている何人かの決定を従う」という制度である。これがあることによって、村は団結をたもつことができたが、一方、村の人は批判があってもあまり出来ない傾向があった。

この制度が廃止されたことは、国民にとって大きなこととなった。

ビレンドラにとっては、国民を思っただけの決断であり、国民にも十分な判断する力があると信じていたからできた決断だった。

ビレンドラはさらに、基本的人権、複数政党制などを認める新憲法を公布し、歴史を大きく変えた。

ネパールを立憲君主制へ移行させた。

絶対君主制が終わりを遂げた。

ビレンドラは国民思いであり、国民からは厚い信頼を受けていた。

誰よりも国民のことを考え、行動し、決断できる名君であった。

9. 中国のオウシンギョク氏との交流：世界史的巨人鄧小平を学ぶ

—中国から来られたオウシンギョク氏（左から4人目）—



中国からこられた実業家、王振玉（オウシンギョク）氏と交流した。王振玉氏は、バイタリティにみちあふれた方で、チャンスと直感するものに、どんどん挑戦し、世界をあいてにビジネスを展開している方である。

わたしたちは、困難があってもつきすすむ、王氏の活気に魅了された。

王氏との交流がきっかけで、中国のことを学習した。

わたしたちが最も学んだのは、鄧小平だった。

鄧小平は、現実をよくみてかんがえぬき、決して固定観念にとらわれない、大胆で柔軟な思考をみにつけた指導者であった。

鄧小平（1904～1997年）は、中華人民共和国を建国した毛沢東の逝去後、事実上、中国の最高指導者となった。

改革開放など、毛沢東時代の政策を転換して、現代中国の路線を築いた。

鄧小平は、中国の近代化と工業化を推進し、中国社会の様相を変えた。

持続可能な国家発展の道を、定型化させた。

「民を豊かにしたいという思い」から、中国の戦略を「改革開放」に大転換させ、現代「大中国」のいしづえをつくったといえる。「先豊論」、「一国2制度」など、理想を掲げながらも、冷厳な現実主義と大戦略観をもったリーダーであった。

鄧小平は、創造的に中国の特色のある社会主義システム構築を志向した。計画経済と市場経済の長所を効果的に結合したシステムである。

つまり、国家の命脈にかかわる最重要分野、エネルギー、食糧、国防などについては、国家が掌握する。

一方、その他、広範な、民衆の衣食住、生活などについては、民間活力の解放を大いに促進する。

ここから、実際、百度、テンセント、アリババ、ファーウェイなどのような、成功する民間企業が、多数発生して、中国経済を、発展させ、民衆の生活水準の向上につながっている。

確かに、従来の資本主義諸国のように、市場の活性化に力を入れているが、それでも、強い国家を維持しているので、大資本集団による悪しき操作のような現象は、回避できる。

その意味では、労働者の国家であり続ける。

現代中国の制度については、「国家資本主義」、「市場型社会主義」など、複数のいわれ方がある。

鄧小平は、固定観念に束縛されず、それらを打ち破る思考、実践的、実用的、現実を基盤にした発想ができる頭脳をもっていた。

その大胆な思考の象徴的な表現が、「黒猫白猫論」であろう。

「ネズミをつかまえるなら、黒い猫でも、白い猫でも、どちらでもいいではないか(It doesn't matter whether the cat is black or white, as long as it catches mice>」は、米国をはじめ、全世界に、中国の流儀を伝えた名言であった。

中国流の「とりあえず発展するためなら、ドグマのような思考にはとらわれず、大胆に実験してみる、よくなかったら、やめて、また違う方法を実験してみる」という姿勢は、道を開く、勝つために、有効である。

鄧小平の時代、外交の狙いは、ソ連の脅威を戦略的に解決することにあった。

ソ連はつねに、中国を圧迫して屈服させるため、南側の辺境で中国を挑発するように策動してきた。

1979年、ソ連は中ソ国境に近いアフガニスタンに侵入した。

鄧小平は、カーター政権の米国と、正式に国交を樹立して、ソ連を抑制する方針を固めた。

鄧小平時代のインドシナも、複雑であった。

ソ連がベトナムの後ろ盾になっていた。

中国は「ソ連・ベトナム」をけん制するために、カンボジアへのアプローチをせざるをえなかった。

「ソ連・ベトナム」対「中国・カンボジア」という対抗軸が、一時的に形成された。

鄧小平時代、ソ連の指導者は、当初ブレジネフだった。1980年代に入ると、ブレジネフの健康状態が悪化し、病気になった。

その後、アンドロポフとチェルネンコになったが、短命政権だった。

1985年、若きゴルバチョフが登場した。

ゴルバチョフは、巨大な対外戦争、対外援助を軽減したかった。

よって、対ベトナム援助からも、引く方向にでた。

ゴルバチョフは、鄧小平に対して、好意的な姿勢を示す。鄧小平はソ連に、ベトナム、カンボジアのヘンサムリン勢力、アフガニスタン、西・北・東の中国との国境周辺から、軍備を大幅に撤退させるようにと、伝えた。

中国や米国からの圧力、説得があり、結局、ゴルバチョフは、アジアだけでなく、欧州、ラテンアメリカ、アフリカにあったソ連の覇権領域からも、急速に引いて行くのであった。それはおそらく、ソ連の内政を重視するためであったし、あるいは、そのような外交姿勢によって、西側の世界的財閥等からのソ連への投資を期待したのかもしれない。

10.見附商工会の平井氏とベトナムのユエン女史との交流：世界史的巨人ホーチ

ミンを学ぶ

—平井氏とユエン女史—



ベトナムからこられ見附商工会で働かれているユエン女史と、上司の平井様と交流した。平井様は、ベトナム人技能実習生に関する詳細な現状、未来について、説明してくださいました。また、人生経験が大変豊富な平井様は、どこにあっても誠実に生き抜くことの大切さを、私たちに教えてくれました。

ユエン女史は、見附市がベトナムから多数の技能実習生をうけいれ、また、ベトナムのダンフンへ中学生のスタディツアーを展開するなかで、見附市とベトナムのかけはしを象徴する方で、技能実習生の生活などを、応援されています。

平井様、ユエン女史との交流がきっかけで、ベトナムについて学びました。その中で、ホーチミンというリーダーに注目し、学ぶことになりました。ホーチミンは、1890年ベトナムのフエで生まれました。

フランス、イギリス、アメリカ、ソ連に渡り、働き、学び、実践をつみながら革命家として力をつける。

ホーチミンには、パワーのある大国のもとで虐げられた自国を、解放し、多くの人に幸せになってほしいという、純粋な市民思いの姿勢があったのだと思う。

ホーチミンの純粋なスピリットのもとで、団結し行動する人々の姿は、全世界に影響をあたえた。

「圧倒的多数の世界の市民がつくる世論」というものが、世界で一番ちからがある、ということを証明したのが、ホーチミンのベトナムであった。

まとめ

人間は、宇宙史 138 億年・地球史 46 億年・人類史 700 万年という、長大な時間認識をもつに至った。

ほとんど全ての「人間と社会の考え」は、長大な歴史の中であって、「一時的につくられた産物」にすぎない。

わたしたちが地域国際交流をきっかけにして学んだ『世界史的巨人』はみな、より新しく進歩した「人間と社会の考え」をつくることに挑戦したのだと思う。

人間とは『より新しく進歩した考え』をつくり行く実在である。

であるならば、地域にあっても、『より新しく進歩した考え』ができて行くことこそ、大切である。

わたしたちは、人種的差異・民族的差異・出生国の差異をはるかに超越した、完成度の高い『人類共生の地域社会』という考えを、提唱したい。

謝辞

今年度のゼミ活動にお力添えして下さった方々、全員に御礼申し上げます。

特に、長きに渡りゼミのアドバイザーを請け負っていただいている、グリーン・フィロソフィー代表大出恭子様、フェアトレードショップ・らなあふうオーナーの若井由佳子様には、最初から最後まで、細部に至るまで、ご指導して頂き深く感謝いたします。

重ねまして、今年度ゼミ活動にご協力して下さいました、皆様全員に御礼申し上げます次第であります。

長岡大学 学生による地域活性化プログラム 各プロジェクト報告書

1. 長岡市撰田屋の魅力を高め、観光客を増やし、地域活性化を図る。
～現状の把握と分析～
生島義英ゼミナール
2. 栃尾地域の PR による活性化：
空き家の再活用による地域振興活動と二十村郷の錦鯉の PR 活動
石川英樹ゼミナール
3. 栃尾地域の PR による活性化：
栃尾繊維業の PR に向けたマスク考案と裂き織りによる商品開発
石川英樹ゼミナール
4. 栃尾地域の PR による活性化：
フォトコンテスト開催による栃尾地区の PR
石川英樹ゼミナール
5. まちの情報発信拠点「まちの駅」の認知度アップに向けて
鯉江康正ゼミナール
6. 十分杯で長岡を盛り上げよう！
－動画で伝えたい 十分杯と長岡の魅力！－
権 五景ゼミナール
7. データエビデンスに基づいた地域をより良くするための提言
～地場産業・観光を中心に～
坂井一貴ゼミナール
8. オープンファクトリーで長岡を活性化！
栗井英大ゼミナール
9. グラスルーツグローバリゼーション
－草の根・地域からの人類一体化の推進－
広田秀樹ゼミナール
10. 商品開発から学ぶ会計と経営
～伝統文化と現代技術の結晶「みどり繭」を巡って～
喬 雪氷ゼミナール

令和2年度 学生による地域活性化プログラム 広田秀樹ゼミナール活動報告書

【発行日】 令和3年3月30日

【発行人】 村山 光博

【発行】 長岡大学

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

T E L 0258-39-1600 (代)

F A X 0258-33-8792

<https://www.nagaokauniv.ac.jp/>